

第1回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

準1級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30)
1~20は音読み、21~30は訓読みである。

- 1 羅紗の赤い陣羽織を纏う。
2 中国古典の翰藻に親しんできた。
3 豪宕の気に満ちた青年である。
4 衆生済度の弘誓を立てる。
5 作品に犀利な感覚がほとばしる。
6 凍土に覆われた祁寒の地を訪れる。
7 自ら豎立するの志を欠いている。
8 江戸時代の娼妓が描かれている。
9 矛戟の下に万死を免るるを得た。
10 或問形式で書かれた入門書を読む。
11 金属の接合部を盤陀付けする。
12 叛乱を企てた酋領が処刑された。
13 悪戦苦闘して蟹行文字を読解する。
14 ひたすら叩首して詫げる。
15 郁烈たる梅林を遊歩する。
16 婁宿は二十八宿の一つである。
17 自ら課して善道を諮諏すべし。
18 負笈して名師に参学す。
19 荻花楓葉孤村に泊す。
20 渚宮の東面煙波冷ややかなり。
21 楣の巨木を目印にする。
22 道が二俣になつてゐる。
23 埠を離れる船を見送つた。
24 立部を置いて人目を遮る。
25 一八九九年の干支は己亥だった。
26 親の遺言を徒疎かにはできなかつた。
27 怠慢の誹りを免れない。
28 貴方から非難される謂れはない。
29 諒に事理を弁えぬ者共である。
30 舟はすでに行く、而も剣は行かず。

(二) 次の傍線部分は常用漢字である。その表外の読みをひらがなで記せ。

- 1 言葉に刺があつた。
2 微細な孔が無数にある。
3 地震が全てを塊と化した。
4 喚きながら走り去つた。
5 反対派が勢力を伸してきた。
6 徳義も地を掃うに至つた。
7 一同斉しく感じ入つた。
8 少くして王者の風格が漂つてゐる。
9 幾ど涙を流さんばかりだった。
10 奇しくも二人は同じ日に誕生した。

(三) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを送りがなに注意して)ひらがなで記せ。

- 健勝... 勝れる
ア 1 耽溺... 2 耽る
イ 3 按摩... 4 按える
ウ 5 拘繫... 6 繫ぐ
エ 7 煩擾... 8 擾れる
オ 9 喬松... 10 喬い

(四) 次の各組の二文の( )には共通する漢字が入る。その読みを後の( )から選び、常用漢字(一字)で記せ。

- 1 現地を隅から隅まで(1)査する。高(1)的な作風で知られる。
2 (2)波を送られてどぎまぎする。麦(2)の候如何お過ごしですか。
3 文豪らしい(3)馴な筆致である。敵の健闘を称える(3)量を持つ。
4 学界きつての(4)秀である。天下の英(4)を教育する。
5 眼鏡を置いた場所を失(5)した。後日に備え(5)書を取り交わす。
が・しゅう・しゅん・せい
とう・ねん・ふう・ゆう

(五) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。(40)

- 1 敵の狙いは人心のカ克蘭にある。
2 貴婦人にフンソウして舞台に立つ。
3 傷口がカノウした。
4 春の野でサワラビを摘む。
5 海外の一流選手にゴして戦つた。
6 色糸で布にシシュウを施す。
7 カップクのいい初老の紳士だった。
8 大器のヘンリンを示した。
9 理路整然としてハンバクの余地がない。
10 話にオヒレが付いていた。
11 今では不俱戴天のキュウテキである。
12 履歴書のヒナガタを参考にする。
13 公園で鳩が餌をツイバむ。
14 右の肩をダツキユウした。
15 三つドモエの争いになった。
16 大軍がウンカの如く押し寄せた。
17 縦書きのケイシを使用する。
18 ケイシに恵まれず一代で絶えた。
19 山ビルに血を吸われる。
20 野ビルの若葉を食用にする。

準1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

(六) 次の各文にまちがって使われている同じ音訓の漢字が一字ある。上に誤字を、下に正しい漢字を記せ。

- 1 地域社会の生活情報を蒐集して編輯した冊子を住民に無料で配布する。
2 黒い漆器の文箱の蓋に施された功緻極まる金蒔絵にしぼし見惚れていた。
3 我が社にも御多聞に洩れず今猶學歷偏重の弊風が色濃く残っている。
4 尺熱の太陽が照りつけ砂塵の舞い上がる戦場に果てしない死闘が続く。
5 巨大疑獄事件の鍵を握る代議士秘書が失走して未だに行方が知れない。

(七) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1

次の四字熟語の(1)~(10)に入る適切な語を後の□から選び漢字二字で記せ。(20)

- (1) 曲浦 一目(6)
(2) 雲客 容貌(7)
(3) 行歩 筆耕(8)
(4) 転生 虚心(9)
(5) 名人 膏火(10)

かいい・けいしょう・けんでん
ざが・じせん・せきし
たんかい・ちようてい・りようぜん
りんね

問2

次の1~5の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10)

- 1 美しい女性の形容。
2 むごたらしい光景。
3 自業自得に同じ。
4 本末顛倒に同じ。
5 思いあがって人を見下すこと。

禾黍油油・曲眉豊頬・朝成暮毀
傲岸不遜・死屍累累・积根灌枝
敦篤虚静・向天吐唾

(八) 次の1~5の対義語、6~10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。(20)

- 対義語: 1 出塵, 2 安泰, 3 僅少, 4 破綻, 5 頑強
類義語: 6 吉兆, 7 教化, 8 波及, 9 両雄, 10 機知

きたい・けいもう・げんぞく
しょうずい・せいじやく・そうへき
でんぱ・とんさい・ばくだい
びほう

(九) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分を選択して漢字で記せ。(20)

- 1 網ドンシユウの魚を漏らす。
2 ヨウリュウの風に吹かるるが如し。
3 ハシにも棒にも掛からぬ。
4 一敗地にマミれる。
5 一斑を見て全豹をボクす。
6 ヒヨウタンから駒が出る。
7 ムグラの雫、萩の下露。
8 嘘も誠も話のテクダ。
9 家貧しくしてコウシ頭れ、世乱れて忠臣を識る。
10 ウの真似する烏。

(十) 文章中の傍線(1)~(5)のカタカナを漢字に直し、波線(ア)~(コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。(20)

A 夕方後山に登る。夕風青茅を戦がして、百合の花の香其処はかとなく漂い、丘上しよんぼり月の影あり。日は大山の右に入りて、残曠猶明らか、金樺色の横雲ありて、宛ら彩旛の翻れる如く、西より北に横たう。富士は薄きアイイ口の暮雲を抽ぎてほのかに其の頂を露し、海は紫を流して、一帆オモム口に其の面を移り行く。

村の方を望めば、其処にも、此処にも、麦わら焼く煙立ちのぼる。煙の本に紅の火閃くは、風ありて煽れるなり。見る見る煙は村を包み、山を侵して、黄昏は其の中より湧きぬ。蛙声風にのりて聞こゆ。

(徳富蘆花「自然と人生」より)

B それはひどく真つ暗な夜のこと、大人たちは台八を牽いたり、自転車を押して、てんでに白い息を吐きながら勇ましく進んで行った。チヨウチンがさつと行く手を照らし、みんなの頬はてらで燃えていた。夜更けの事務室でお茶を飲んでいる大人たちは勇ましかった昔の面影をどこかに潜めていた。静三にとっては、笠岡の頬にある赤いほくろまで神秘におもえた。

実際、笠岡は時折、静三の虚を衝いて、風のように現れることがあった。ある夕方笠岡は静三が往来にいるのを見つけると、何か誘うように手招きした。彼に従って、とつと橋の方へ歩いて行くと、橋の袂から石段を伝い、大きな船の中に連れて行かれた。入り口の手すりに烏が括りつけてあるのが静三の眼に奇怪におもえたが、船の内部は畳敷きの部屋になっていて、そこには父をはじめ店の人たちが集まっていた。...それから静三は学校の帰り路でよく自転車に乗っている笠岡と出逢った。笠岡は後ろからさつとやって来ると、ひよいとナゾのような表情をして自転車をとめる。それから静三を擁うようにして、前の方の席に乗せるのであった。笠岡はどこかピンシヨウで花車なところがあった。

(原民喜「昔の店」より)

氏名